



【朝さろん】 83rd morning

## 『芋虫』 江戸川 乱歩

2018年8月5日(日)@渋谷  
参加者:13名、大澤(進行)、芹沢(主宰)

朝さろんでは**参加者全員**で、

- 1、作品を通り一遍の理解から解放します。できるだけわかった気にならず、どこまでも“わからない”という感覚をたいせつにしなが、ていねいに自分の考えと向き合うために対話する、協働的な営みです。
- 2、リラックスして《問い》に向き合しましょう。じっくりと問いへの理解を深め、問いの前提となっていることから本質について、自分の言葉で確認することを第一にしています。
- 3、自分と他者との見解の違いが際立つことを歓迎しましょう。お互いの差異を承認し、その前提に立って共に探究しましょう。

そのため、以下の**心がまえ**をご確認ください。

- a) 話すことよりも、考えることが目的です！だからゆっくりと話しましょう。
- b) 言っていることが分からなければ、質問をして理解に努めましょう。質問大歓迎！
- c) 聞いているだけでもOK、沈黙もOK。だけど、考えることは諦めない。
- d) 話している人の話を最後まで聞く！みんなが安心して話せる場を作りましょう。
- e) ほかの人を傷つける発言でなければ、どんなことでも自由に話してOK。
- f) 意見は大事だけど、同じくらい、質問をすることが大事です。
- g) 意見の批判は◎、相手の人格を攻撃することは× ここをきっちりわけましょう  
意見(発言)はあくまで問いを深めるための“目印し”。人格批判ではありません。

『正論(意見)ってのはあくまでも自分っていう潜水艦の周囲の状況を確認するために発信するソナーなんだよ。自分が正しいと感じる、信じる意見をポーンと打って、返ってくる反響で地形を調べるのだ。ソナーで道が拓けるわけじゃない。』(舞城王太郎(2009)「ピッチマグネット」より)

このような心がまえで臨むと、**副次的なものとして**こんな態度が身につくかもしれません

- 自分の考えが変わるということを、体験を通じて受け入れることができる  
(自己変容の可能性)
- 間違ってもいいんだという体験を、安心安全な場所で得ることができる  
(可謬性の獲得)
- 他者の気持ちや視点に立って考えを組み立てることができる  
(立場の入れ替え、他者への想像的な同一化)
- 問いを深める思考力を養うことができる  
(探求能力の涵養)
- ひとりではなく集団での対話や議論に協調できる  
(共通了解志向型の態度の獲得)

QWORD

ほかの考えは？

QWORD

反対は？

QWORD

くらべると？

QWORD

もし  
～だったら？

QWORD

たとえば？

QWORD

立場を  
かえたら？

QWORD

なんで？

QWORD

そもそも？



※Qワードカード

by 「Q～こどものための哲学～」 (c) NHK All Rights Reserved



## 【推薦のことば】 推薦者:大澤さん

主要登場人物は2人だけ、30ページほどの短編ですが、人間の欲望や愛情、尊厳などについて、思わず考え込ませるを得ないような濃密で濃厚なお話です。少年探偵団からご無沙汰という人も、乱歩大好きという人も、今回初めて読みますという人も、少々刺激的な独特の世界観と一緒に堪能できたらうれしいです。

### 【問い】 (ご発言は必須ではありません)

#### 1. 本作を読んだ感想について

気になる点、話し合いたい点、疑問点などを皆さんから伺って、まずはそれに沿って対話ができればと思います。

#### 2. 時子について

なぜ時子は鷲尾少将からの褒め言葉を、彼女のいちばん嫌いな茄子の鴨焼の味で思い出すのでしょうか。

#### 3. 須永中尉について

中尉は本当に頭が鈍くなっていたのでしょうか。  
彼が書いた「ユルス」とは、どんなことを意味しているのでしょうか。

## 【テーマ】〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

ふだんみなさんはどのような本を読まれているでしょう。あるいは、過去にどんな面白くて、記憶に残る、大切な1冊をお持ちでしょうか。

不定期で開催している「リクエストシーズン」も今回で4回目です。毎シーズン、みなさんの個性的でユニークな選書と、それ以上に濃密な選書理由や対話の時間を提供していただいています。数ある朝さろんの開催回のなかでも、このリクエストシーズンがいちばん印象に残ってる、という方も大勢いらっしゃいます。今回のリクエストシーズンでは、いつもより長く期間を取って、より幅広い選書やそこでの対話の広がりを観察してみたいと思います。朝さろんとしては各回が、推薦者さんとの真剣なコラボレーションという形になります。

推薦書の魅力をきちんと紹介するのはもちろん、推薦者だからこそその「お題」や進行なんかも出しているただきながら、そこに一定の朝さろんらしさもマッチングできればと思っています。本への熱烈な愛情だけでなく、参加者全員でその魅力を味わい、深いところで受け止められたらと思います。推薦者さんの個性とあいまって、各回ごとにきらきらと印象を変えていく「リクエストシーズン」、ごゆっくりご堪能ください。

## 【本】

### 『芋虫』 江戸川 乱歩

初出刊:『新青年』1929(昭和4)年1月  
テキスト:『江戸川乱歩傑作選』江戸川乱歩(新潮文庫、1960年改版)

## 【江戸川乱歩(えどがわらんぽ)】

1894年(明治27年)10月21日 - 1965年(昭和40年)7月28日。大正から昭和期にかけて主に推理小説を得意とした小説家・推理作家。戦後は推理小説専門の評論家としても健筆を揮った。実際に探偵として、岩井三郎探偵事務所(ミリオン資料サービス)に勤務していた経歴を持つ。

創作活動初期は、「D 坂の殺人事件」、「心理試験」など、いわゆる本格派と呼称される短編を執筆し、日本人の創作による探偵小説(推理小説の意。1955年(昭和30年)頃まではこの呼称が一般的であった)の基礎を築いた。

1926年(大正15年)12月より1927年(昭和2年)2月までの約3ヶ月間、朝日新聞に『一寸法師』を連載する。病欠の山本有三の代役だった。作品は評判がよく、映画化された。しかし乱歩は小説の出来に満足できず休筆宣言をし、各地を放浪したという(以後、戦前の乱歩は「休筆中に放浪」というパターンが多くなる)。

1928年(昭和3年)8月、14ヶ月の休筆のあと、乱歩は自己の総決算的中篇「陰獣」を発表する。これは変態性欲を題材にした作品で、不健康とみなされた一方、横溝正史(当時の探偵小説の雑誌「新青年」の編集者)により「前代未聞のトリックを用いた探偵小説」と絶賛された。戦前の本格探偵小説の新時代を築いたといえる。「新青年」は「陰獣」を前後2回に渡り掲載したが、雑誌は増刷するほどで、当時の世評の高さがうかがえる。

大衆は「本格もの」の探偵小説よりも「変格もの」の通俗スリラーを支持した。乱歩の本意である本格ものはあまり反響がなかった。同時期に多数発表された長編探偵小説の中で、戦後継続して再刊されたのは乱歩の作品だけである(空前のリバイバルとなった横溝正史ですら、戦前長編は1,2作を除けば一時的に再刊されただけ)。また、ミステリの枠に留まらず、怪奇・幻想文学において存在意義がある。猟奇・異常性愛を描いた作品は後年の官能小説に多大な影響を残した。

## 【内容】

傷痕軍人の須永中尉を夫に持つ時子には、奇妙な嗜好があった。それは、戦争で両手両足、聴覚、味覚といった五感のほとんどを失い、視覚と触覚のみが無事な夫を虐げて快感を得るというものだった。夫は何をされてもまるで芋虫のように無抵抗であり、また、夫のその醜い姿と五体満足な己の対比を否応にも感ぜられ、彼女の嗜虐心はなおさら高ぶるのだった。

ある時、時子は夫が僅かに持ちうる外部との接続器官である眼が、あまりにも純粋であることを恐れ、その眼を潰してしまふ。悶え苦しむ夫を見て彼女は自分の過ちを悔い、夫の身体に「ユルシテ」と指で書いて謝罪する。

間もなく、須永中尉は失踪する。時子は大家である鷲尾少将と共に夫を捜し、「ユルス」との走り書きを発見する。その後、庭を捜索していた彼女たちは、庭に口を開けていた古井戸に何か落ちた音を聞いたのだった…。

\*

編集者の要望により、掲載時のタイトルは「悪夢」とされたが、後に「芋虫」に戻された。

角川文庫の解説によると、当時は『改造』のために書き下ろしたものであったが、反戦的な表現と勲章を軽蔑するような表現があったため、編集者が当局の検閲を恐れて娯楽雑誌である『新青年』にまわさ



れたがそれでも掲載時は伏せ字だらけだった。また、戦時中多くの乱歩作品は一部削除を命じられたが本作は全編削除を命ぜられた。

創元推理文庫の乱歩自身の解説によると本作品発表時に「左翼からはこのような戦争の悲惨を描いた作品をこれからもドンドン発表してほしい」との賞賛が届いたが、乱歩自身は全く興味を示さなかった。

上述の戦時中の全面削除については「左翼より賞賛されしものが右翼に嫌われるのは至極当然の事であり私は何とも思わなかった。」「夢を語る私の性格は現実世界からどのような扱いを受けても一向に痛痒を感じないのである」と述べており、この作品はイデオロギーなど全く無関係であり、乱歩の「人間のエゴ、醜さ」の表現の題材として四肢を亡くした男性主人公とその妻のやりとりが描かれているにすぎない。

## 開催後 MEMO:

---

今作「芋虫」は会の序盤からいきなり本筋を突くようなご意見が多く出され、最後までゆるむことなく対話が続いた、今夏のような熱い回となったように思います。

短編なのに「厚い」物語性、奥行き。終了後の昼食会も含めて、「芋虫」やその周辺について、高所低所からさまざまに鑑賞できたのではないかなと思います。

本作で中心的に描かれる二人の男女の様子から、

- ・ (理想的な) 《ケア》とはなにか?
- ・ ケアする／されるの境界線はどこに、どんな風にたちあがってくるか?
- ・ 依存的な関係とはなにか? 共依存とはなにか?
- ・ よい依存と、わるい依存があるのか? 分けられるのか?
- ・ 性愛、SM 関係ではないのか。お互いが満たされているのではないか?
- ・ 恋愛として完結しているのか? 恋愛を越えたなにかが混じっているのか? それはなにか?
- ・ 愛憎半ばなのか? 憎んでいるのか?
- ・ 無言の須永中尉は、天井を見上げてなにを考えていたか。
- ・ その胸中が徹底して明らかにされないのはどのような仕掛けか。
- ・ 目をつぶすことはなにを意味したか?
- ・ 盲目という”事実”が引き金で自殺したのか、あるいは、眼潰しという”行為” (危害) が引き金なのか?
- ・ 自殺の原因、動機はどこにあるか
- ・ 須永中尉は本当に盲目だったのか。完全に盲目なのに、どうやってそこまでいったのか。
- ・ 結末部の樹から落ちる芋虫の幻視は、象徴なのか、隠喩なのか、どんな風に解釈できるか?
- ・ 芋虫状態であることと、「見る」ことだけは十全に可能であることと、「眼潰し」の関連をどう読むか
- ・ 「見られ続けること」と田舎の別宅に住まわざるを得ないことと、孤独、の関連をどう読むか
- ・ 須永中尉は弱者である一方、その中に流れる正義感、倫理、軍人としての過去。時子が持てないそのような社会性をどう考えるか
- ・ < 視る男／視られる女 > という乱歩固有のモチーフと、本作でのそのアレンジから、なにをどんな風に考えられるか

などの問いが出され、それぞれについて吟味がなされました。

アフターのデニーズでは、井戸に転落死した須永中尉を見たその後、残された時子はどう生きるか？ という話も出ました。作品のその後、ですね。これについては鷺尾少将(老人)の妾になるのでは、という意見が多かったように思います。

須永中尉が名誉の負傷を負った後、それを献身的に介護しながらも、社会的な弱者となった時子(たち)は、都心の友人知人たちから切り離され、片田舎の少将宅の離れに(けっして望まない形で)身を寄せることになりました。

実態は無残な(人間未満の)芋虫に近い様であっても、どこまでも「名誉の負傷」「正義と倫理の軍人」である瞬間を黙考中の瞳の奥に感じさせる須永中尉と、それが自らの手の届かないものと知りたまらなく狂おしくなっている時子。芋虫らしからぬ双眸で、ときに窃視される時子。ふたりの力関係は決して一定かつ固定的ではなく、状況や昼夜や瞬間瞬間に応じて、上下しているようにも思われます。

それが表面的な描写ではなく、物語中の構造としても描かれる。その奥底に、決定的に横たわれる、男と女の(時代的な)力関係。「社会」への接続の非対称性。何層にも仕掛けられた皮膜の向こうで、時子と須永中尉は不思議な均整をとったりします。

このお話しが読者に問いかけたものは一体なんだったのか、どこまでも尾を引く作品です。

3時間じっくりと一冊の本に向き合いながら、その後の軽食時間のリフレクションも挟みつつ、『芋虫』を縦横無尽に味わうことができたと思います。

ご推薦・ご担当いただいた大澤さん、あらためてどうもありがとうございました♪

## 進行役のご感想 by 大澤さん

---

8月の35度近い猛暑の中、朝さろん『芋虫』に参加いただき、まことにありがとうございました。

短編にもかかわらず、会の最中ほとんど途切れることなく、貴重な意見をたくさんいただくことができました。

これもひとえに、皆さんがこの物語に真摯に向き合ってくくださったおかげだと痛感しています。

『芋虫』について深く考えてみたいと思ったきっかけの一つが、時子の持つ嗜虐心でした。わたしの中にも確実にある、このコントロール不能な感覚が、一体どこからもたらされているのか、とても興味がありました。

今回の読書会で、少しはその正体に近づけたのではないかと感じています。

これだけでも個人的には大きな収穫でした。



それから、物語の「その後」について。

須永中尉が亡くなった後、時子が鷲尾少将の妾になるのは、おそらく確実でしょう。

時代が時代なら、彼女も誰かの庇護のもとで生きるだけでなく、小さなコミュニティの外へ出て、自立して生きることができたかもしれません。

一概にどんな生き方がよいとは言えないけれど、その時彼女の取りうる選択肢がたった一つしかなく、他について知る由もなかったというのは、なんだか残念でなりません。

最後に、このような機会を与えてくださった、さろんの芹沢さんに深く感謝を申し上げます。

本当に、楽しい時間でした！

## 今後のラインナップ / テーマ〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

▼#84 9/9(日) たけはな さん 『植物図鑑』 有川浩 (幻冬舎文庫)

推薦コメント:

「思い出す 恋の甘さとほろ苦さ」

照れくさくなるような恋愛小説ですが、登場人物達の、相手を思う気持ちや心の動き、気持ちや心を伝える事、わかろうとする事、もどかしさ、など、恋愛ではなくても、まわりの人達との付き合い方にも参考に出来そうです。

恋愛だけにとどめず、人同士の交流という点でとらえてみたり、恋心によって主人公が変わっていく様子などを追いながらこの小説を味わえれば、と思います。人同士の付き合いに必要な事、大事にしたい事って何でしょうね？

野草の写真やレシピもあって、植物とのお付き合いもしたくなるかも？な小説です。

「植物 街並 空 見つ 歩けばのびのび 身体もこころも」

あらすじ:

『お嬢さん、よかったら俺を拾ってくれませんか。噛みません。躰のできた良い子です——。思わず拾ってしまったイケメンは、家事万能のスーパー家政夫のうえ、重度の植物オタクだった。樹という名前しか知らされぬまま、週末ごとにご近所を「狩り」する、風変わりな同棲生活が始まった。とびきり美味しい(ちょっぴりほろ苦)“道草”恋愛小説。レシピ付き。』

▼#85 10/14(日) ほーりさん 『君の隣臓をたべたい』 住野よる (双葉文庫)

▼#86 11/11(日) 楠本さん 『神様のいない日本シリーズ』 田中慎弥 (文春文庫)

【原則、毎月第2日曜のAMに開催】